

地元を守る町民の底力

平成28年熊本地震の教訓を胸に、災害への備えを進めてきた町。しかし、再び地震が町を襲いました。混乱や恐怖の中、町の防災を担う消防団は何を経験し、どう行動したのか。中学生ボランティアの奮闘と共に、地元を守る町民たちの活躍を紹介します。

発災後、迅速に活動を開始した町消防団

発災直後、最初に取った行動は

島崎団長(以下、島崎)

発災後、まず行ったのは団員の安否確認でした。彼らにも守るべき家族がいるので、そこを最優先としました。

全員の無事を確認した後、本団と分団それぞれで、出動可能な人員の整理と活動できる規模の把握に努めました。

その後、本団はまずは町役場に集合しました。使用できる資機材を確認し、役場周辺の被害状況を手分けして確認しました。

電柱や納屋の倒壊、道路や

橋梁の破損、水道管の損傷による路面からの水漏れなど、さまざまな被害が次々と報告されました。

これらの被害は写真に収め、「LOGOチャット(自治体向けチャットツール)」で団員や町役場に共有しました。

前回の地震では連絡調整や情報共有にとっても苦労したので、LOGOチャットは団員の安否確認にも活用でき、非常に有効でした。

富永第二分団長(以下、富永)

各分団は、それぞれの地域の見回りを行いました。防火水槽の点検など、各地の安全確認を進める中で、すぐに問



割れた道路から流れ出した水

題となったのが、県道高森線の信号が停止していたことでした。

停止した信号機 懸命の交通整理

富永 発災は夕方、ちょうど帰宅する車両で県道が混雑する時間帯でした。

主要な信号がいくつも止まっていたため、すぐに団員4人でブロックごとに手分け



町消防団 第二分団長 富永英二さん

し、手旗信号による交通誘導を開始しました。

しかしながら、私たちもそうした訓練を受けていたわけではないので、混乱の中、必死に対応しました。本団にがむしゃらだったので、記憶にない部分もあります。

ただ、事故が起ければ人命にも関わることで、対応した団員は覚悟を持って当たってくれたと本当に感謝しています。

その後、交通量が減る午後9時から10時頃まで、交代しながら任務に当たりました。幸い、事故などが起きなかったため、最後はホッとしました。



倒れた電柱。各地で停電が起こった

発災日翌日から 各所で給水支援を実施

島崎 翌日からは、給水支援に当たりました。発災当時、各地で水道管の漏水や水道水のにごりが報告され、給水支援が最重要課題でした。

まずは、地域共生センター

カタルで役場職員と協力し、給水車とペットボトルによる支援を行いました。その後、計5カ所の給水場で2日間、午前8時から午後8時まで、2〜3人一組の交代制で任務に当たりました。

10年前から改善した部分 と見えた課題点

島崎 団の活動は30日で終了したのですが、その後も各分団の判断で、継続して避難所への物資運搬支援などを行いました。また、医療機関に対しての給水支援として、ペットボトル1500本を運びました。

島崎 10年前の経験から、連絡系統や役割分担が明確化されており、混乱の中でもスムーズな連携が行えたことは、大きな実績でした。

しかし、人的リソースはどうしても限られており、特に、活動中の水・食料の調達課題として残りました。

消防団の活動は力仕事で中心と思われがちですが、こうした災害対応では後方支援も重要です。

物資調達や炊き出しなど、後方支援であれば、性別や年齢を問わず可能です。ぜひ若手の入団が増えてくれるとうれしいですね。

「10年前はいろいろな人に助けてもらった。 次は若い僕たちが助けなきゃ、と思いました」

(左から) 吉住奏斗さん、恒松大士さん、
矢野心乃祐さん、東雲総汰さん



8月1日に開設された災害ボランティアセンター。開設当初からボランティア作業に従事する4人の中学生の姿がありました。

「どうせなら、夏休みの時間をこいうことに使おう」吉住さんのSNSでの呼び掛けが集まったのは、普段陸上部で共に汗を流す仲間たち。10年前はまだ幼く、当時の記憶は鮮明ではないけれど、各地から集まる支援活動の映像を見るたびに、彼らの胸は熱くなったそうです。

約10日間、彼らは被災住宅を訪れ、災害ごみを仮置き場へ何往復も搬入しました。被害の大きい住宅では、家財は倒れ、壁は剥がれ落ち、一面にガラスがちらばっていたといいます。

チームには、会社を休んで駆けつけた人や、東京から日帰りで参加した人もいました。たくさんの感謝の言葉と、温かい全国からの支援を受け取った4人。

「将来、同じような災害が起きたら、すぐに駆けつける大人になりたいです」と、彼らは未来の決意を語りました。